

子育て支援プロジェクトにおける 父親グループの特徴と活動内容との関連

清水 里美^{*1}・馬見塚珠生^{*2}・矢本 洋子^{*3}

要 旨

少子化や児童虐待問題が深刻化する現代社会においては、さまざまな子育て支援策が講じられている。なかでも、父親に対する子育て支援のあり方が注目されている。ところが、父親を対象とした支援内容や支援体制に関する研究はまだ十分におこなわれていない。とくに、父親同士の自主的な活動については注目されていなかった。そこで、筆者らが企画した父親による父親支援プロジェクトの2年間の活動報告をもとに、父親グループの特徴とその活動内容との関連を調べ、支援における留意点について検討した。プロジェクトに参加した7つの父親グループは、参加動機などから、「役割意識型」「自己実現型」「新米パパリーダー模索型」の3つに分類された。また、それぞれのグループが企画した父子向けイベント内容は、「教授型」と「娯楽型」に分けられた。「役割意識型」では「教授型」、「自己実現型」では「娯楽型」のイベントとの結びつきが強かった。また、「新米パパリーダー模索型」は、前半は「教授型」イベントが多くみられたが、後半に向かうにつれ、「娯楽型」イベントが増加する傾向が見出された。プロジェクトを通じて父親グループ同士が活動内容を報告し合ったことが、父親にとってより魅力的と思えるイベントの企画につながった可能性が示唆された。本研究の結果から、父親への子育て支援では、子育てのノウハウを学ぶ機会を提供するよりも自由度の高い活動の場を提供する方が、主体的な参加を促し仲間関係を築いていけるのではないかと考えられた。

〔キーワード〕 子育て支援 虐待予防 父親グループ イベント

I 問題と目的

近年、子どもの虐待問題は深刻化しており、児童相談所に寄せられる虐待相談の対応件数（平成26年度）は、児童虐待防止法施行前（平成11年度）の7.6倍に増加（88,931件）している（厚生労働省（2016）「児童虐待の現状」）。また、虐待死はほとんどの年で50名を超えている。このように、現代社会では、少子化、核家族化がすすみ、地域で子どもを育てるシステムが十分機能しているとはいえない状況である。竹之下（2014）は、少子化の影響として、育児経験の欠如、兄弟姉妹や近隣の子どもとの遊び経験や共生（共育）文化の消失、コミュニティの崩壊を指摘している。若い世代にとって子育ての知識や経験を獲得する機会が不足しており、そのことが子育てそのものを難しく辛いものとしているのではないかと考えられる。

こういった現状を踏まえ、子育て支援プログラムが各地で展開されている。当初は子育て仲間が得られるような親子遊びの場の提供が中心で、幼児をもつ母親が支援対象とされていた。ところが、次第に子育てスキルなどを伝える講習会的なものが導入されるようになり（雇児発0529第18号平成

*1：平安女学院大学短期大学部保育科

*2：親と子のこころのエンパワメント研究所

*3：SANGO こども臨床心理研究所

26年5月29日)、妊娠期の支援(厚生労働省(2014)「健やか親子21 妊娠期からの児童虐待防止」)や父親への支援が注目されているように、支援対象も広がっている。父親に対する子育て支援の現状としては、小崎(2016)による全国規模の自治体調査結果から、自治体が関与している父親支援内容は「父子手帳などの父親の意識啓発のための活動」「パパスクールなどの父親の学び、学習のための活動(いわゆるセミナー型)」「父親イベントなどの父親の育児参画を求める活動(親子遊びへの参加型)」の大きく3つの種類があることがわかった。また、子育て支援プログラムの提供は、プログラム全体を10とすると、母親向け6.1、夫婦向け3.2に対し、父親向けは圧倒的に少なく0.9であった。小崎(2016)は、この調査結果を踏まえ、男女共同参画の推進や共働き家庭の増加など近年の社会情勢を考えると、少子化対策や子育て文化の構築は、これまでこの分野においてその対象と認識されていなかった父親を含めることにより、新しいステージへと展開ができると提言している。厚生労働省による20代の若者を対象とした意識調査の結果、結婚後も仕事を続けるとしている独身女性のうち出産後に仕事をやめるとした女性の割合が10年前の4分の1に減少していた(毎日新聞2016年11月23日朝刊)。このことから、父親たちを子育て活動に巻き込んでいくために、今後どのような支援プログラムを提供していくかが重要となるだろう。

父親支援の効果については、清水・馬見塚・吉島(2012)が父親グループを対象にペアレントトレーニングを実施し、報告している。結果として、夫婦間のコミュニケーションがよくなり、母親の子育て負担感が軽減していた。一方で、父親は自ら受講申し込みをおこなうことはまれで、清水ら(2012)のペアレントトレーニングにおいても大半が母親に促されての受け身の参加であった。また、セミナーで知り合った父親同士がその後も関係を継続することはなかった。このことから、父親を対象とするセミナー型の子育て支援プログラムでは、夫婦関係や父子関係に肯定的な変化を及ぼすことはできても、父親同士の支援ネットワークを形成することには限界があると考えられた。松本(2012)も、父親向け子育てセミナーに参加した父親へのインタビュー調査から、父親の地域ネットワークへの関心の低さや参加意識の乏しさを指摘している。具体的には、地域とつながることについては「嫁に任せたい」「忙しいから誰かに段取りしてほしい」という他人まかせの姿勢がうかがえるということであった。一方、野々山・二階堂・斎藤(2006)は、小・中学校単位での父親同士の連携の動きが近年活発化していることを指摘している。「おやじの会」や「父親の会」などが全国各地で誕生しているのも、そのような動きの表れといえよう。及川・宮田・新道・登日(2012)は、日本における男性(父親)の出産・育児に関する現状と課題について、社会背景や先行研究を概観しながら考察しているが、その中で、子育て中の父親世代は「父親不在」傾向の強い時代に育ったため、明確な父親モデルが存在しない可能性を指摘している。そして、現在の子育てに即した新たな父親モデルを模索する機会提供の必要性を述べている。学校単位での親子遊び参加型の「おやじの会」活動は、まさに身近な父親モデルが存在し、地域に根差した活動であるため、参加への敷居が低いと考えられる。ところが、例えば、横浜市の調査では、「おやじの会」の認知度は高いが参加度は低い(横浜市教育委員会生涯学習課、2008、p.33)という結果が表れている。参加度が低い理由について、「時間がない」「参加したい活動がない」といった回答が多い(同上、p.35)ことから、ワーク・ライフ・バランスの問題だけでなく、活動内容の魅力も重要であることがうかがえる。それでは、父親たちにとって魅力的な活動とはどのような内容なのであろうか。また、支援者側が提供する子育て支援プログラムについて、対象が父親か母親かによって留意点が異なるのであろうか。

父親に対する子育て支援では、「支援者によるしかけ」(斎藤、2011)や「イベントやテーマ」(宮木、2014)の必要性が指摘されている。また、母親に比べ父親の方が、子育てサークル活動について「行政が管理するよりも親が自主的におこなった方がよい」とする割合が高く(野々山・河野・小金塚、2002)、実際に育児を体験している人と交流をもち、実体験から情報を得ることが有効(及川ら、

2012)と考えていることが明らかとなっている。日比野(2013)による母親への面接調査により、母親たちは社宅、保健所主催の子育て広場、子育てサークル、幼稚園、通園療育施設などで子育て仲間を得ており、会話や行動を共にするうち、心を許し励まし合える関係になることが明らかとなった。父親の場合は、先に述べた「おやじの会」などが子育て仲間と出会える機会になるが、そこには父親にとって魅力的な活動が用意されていなければならないだろう。そこで、筆者らが、父親による父親支援活動を後方支援するという目的でトヨタ財団より地域助成を受け企画した「子どものしあわせプロジェクト(子どものしあわせプロジェクト実行委員会、2015、以下、プロジェクトとする)」に参加した父親グループの活動経過をもとに、父親グループの特徴と活動内容との関連について明らかにする。

本論に入る前に、このプロジェクトの概要について触れておく。プロジェクトは、筆者らが、NPO 法人ファザーリングジャパン関西(以下、FJK とする)の協力を得て、父親が地域における父親ネットワークを広げ、他の父親を応援できる仕組みの構築を目標として、2013～2014 年度の2年間に取り組んだものである(子どものしあわせプロジェクト実行委員会、2015)。プロジェクトでおこなった後方支援は、子育て中の父親向けイベント企画のためのサポーター(FJK のスタッフが子育て講座の講師、学生ボランティアが託児や父親の手伝いなどを担う)、活動費、活動内容を報告シェアする場(子どものしあわせプロジェクトのホームページとオフ会、報告会など)の3つをパッケージとして父親グループに提供するものであった。プロジェクト参加者全員を集めての全体企画内容を表1に、各プログラムへの参加者数(表の参加者は、父親、母親、関係者を含んだ数)を表2に示す。父親グループの募集は、子育て広場などでのちらし配布と関係機関への紹介依頼による方法を取った。プロジェクトに参加した父親グループは7つで、21名の学生ボランティア(男子14名、女子7名)の応援も得られた。父親グループは、期間中、それぞれの地域の父親に対する子育て支援を

表1 子どものしあわせプロジェクトの全体企画内容

時期	実施時期	催 し 名
前半	2013. 8. 24	お父さんリーダー育成講座(京都)
	2013. 9. 1	〃 (大阪)
	各父親グループの取り組み HPでの情報発信・オンライン交流	
	2014. 2. 9	早春オフ会 オフライン交流会
	2014. 4. 20	実践報告会(中間報告会)
後半	各父親グループの取り組み HPでの情報発信・オンライン交流	
	2014. 8. 31	夏のオフ会 オンライン交流
	2015. 2. 22	プロジェクト最終シンポジウム
	HPでの情報発信・オンライン交流は継続	

表2 各プログラムへの参加者数

催 し 名	参加者	スタッフ	オブザーバー	学生	子ども	合計
お父さんリーダー育成講座(京都)	16	11	1	16	3	47
〃 (大阪)	20	15	3	20	9	67
早春オフ会 オフライン交流会	16	11		7	14	48
パパ支援の実践報告会(中間報告会)	33	14	5	19	9	80
夏のオフ会 オンライン交流	14	7		6	11	38
シンポジウム	49	15		15	11	90

テーマとしたイベントを企画実施し、その成果をプロジェクトのホームページ上で発信交流することが求められた。また、オフ会や中間報告会、最終シンポジウムにおいて、互いに取り組みの報告をおこなうことも求められた。プロジェクト終了時に、父親同士の交流の意義について、プロジェクト参加者がどのようにとらえているかを調べたところ、「接点のなかった年齢・業種の人と知り合える」「地域活動に参加しやすくなる、地域ネットワークができる」ととらえられており、機会を提供していくことは意義があることが確認できた。

本研究では、このプロジェクトに関わった父親グループが企画実施したイベント（以下、イベントとする）内容を取り上げ、父親グループの特徴とイベント内容の経年変化との関連を分析する。父親たちが父親仲間や父子で共有したいテーマを見出すことで、これからの父親支援の方向性を探ることができるのではないかと考えられる。実際、父親支援において、活動内容や適切な支援体制に関する研究はまだ十分におこなわれていない。また、これまでの研究では、調査対象として、行政機関や小・中学校など公共性の高いバックグラウンドのある活動が主として取り上げられており、父親同士の自主的な活動については注目されていなかった。プロジェクトに参加した父親グループは、構成人数や参加動機などに違いはあるものの、すべて民間団体であり、自主的な活動支援に関する検討材料が得られるものと考えられる。

Ⅱ 方法

調査内容

プロジェクト開始前に代表者および関係者に対し半構造化インタビューをおこない、参加動機や構成メンバー、課題としていることなどに関する資料を得た。各父親グループが企画したイベントの経年変化を調べるために、ホームページ上での各父親グループのイベント報告内容を収集し、書かれているイベントについて、内容、目的、効果などをすべて取り出した。また、中間報告会や最終報告会における各グループの発表資料も取り出したイベントの補足説明として参照した。

分析方法

各父親グループの特徴について、半構造化インタビューで得られた結果をもとにまとめた。さらに、活動経験、代表者の年代、対象となる子どもの年代、目標、参加のきっかけについてカテゴリ分けし、階層的クラスター分析をおこない、父親グループを分類した。また、ホームページ上で報告されている各父親グループのイベントについて、父親育成講座後の2013年9月から2014年4月20日の中間報告会までを前半、それ以降2015年2月22日の最終報告会までを後半とし、それぞれの時期ごとに内容、目的、前後の活動、および事後の感想を取り出した。イベント内容については、講師を招いての子育て講座開催や恒例行事の企画など既存のプログラムとそれ以外に分け、それぞれの件数をグループごとに調べた。信頼性を保つために、独立して検討したうえで、協議し、最終的な分類を決定した。

倫理的配慮

プロジェクト開始にあたって事後調査への協力についての説明を文書と口頭でおこない、同意書と誓約書を交わした。また、分析に用いた内容は、すべてホームページ上や中間発表会、最終発表会で報告されているものであった。

Ⅲ 結果と考察

父親グループの特徴

半構造化インタビューの結果について、グループを紹介するキーワード、参加動機、背景情報にまとめ、表 3 に示す。A の保育園の男性保育者が呼びかけ人となったグループや C、D の子育て中の新米パパグループの若い世代から、E の小学校のおやじの会グループおよび F、G の子育てに慣れてきた世代、B の地域の世話役のおじいさん世代が中心のグループなど、幅広い世代の父親たちがこのプ

表 3 各父親グループの特徴、参加動機および背景情報

グループ	キーワード	参加動機	背景情報
A	保育園の パパの会	父親の園での活動への参加や協力が希薄だと思っていた矢先のプロジェクトへの誘い、ぜひこの機会に父親のネットワークづくりをしたい。その背景には、保育園の保護者の現状とそれに対する園長の問題意識もあった。	保育園には、中心となる若い男性保育者がおり、プロジェクトへの参加に乗り気。彼を中心にしてお父さんをまとめて行きたい。彼は、もと劇団員であるが、子どもが大好きでこの道にと、現在夜学の保育専門学校に通いながら保育者として働いている。
B	地域の子ども会 世代交代への 仕掛けづくり	リーダーは、長らく地域で子どもたちへの支援活動を行ってきたが、最も大きな課題は世代交代。このプロジェクトで、次の世代のお父さんを巻き込み、次世代育成につなげていけたらという思い。行政としては、地域活動が活発なこの区がモデル地区になることで、それを他地区にも広められればという、ねらいもあった。	子どもと地域との交流が活発な地区。子どもと関わる催しをするにあたり、協力者は多い。この地区では、子どもと年配者との関わりを大切にしてきた。全国的にもいち早く見守り隊を発足させた（2000 年）。構成員のほとんどが年配者だが、こういったところにも現役のお父さんがかかわってくれたらとの思いが強い。
C	市町村の 子育て支援 センター 後押し のパパ支援	子育て支援センター職員主導で、どうしてもパパはお客さんになるイベントが続いており、父親ネットワークが作れない悩みがあった。このグループの常連で、リーダーになってくれそうな人に職員から声をかけて、パパのアイデアでパパ主導のパパグループを実現してもらえるように提案。職員さんの協力を得ながら、パパのアイデアを形にする、パパの意見を取り入れたグループづくりをめざす。	子育て支援センター職員は、ネットワークづくりについて積極的な考えをもっている。しかし、行政内部のさまざまな課題のため、実際には父親支援やネットワークづくりがうまく進められていない。
D	子育て支援 NPO の パパ 部門	母体である NPO 法人の代表と事務局長は、父親のネットワークが必要と思いつつ、立ち上げまでいたっておらず。冒険遊び場などに来ているパパ、コモンセンスファシリテーターをするパパなど熱心なお父さんに声をかけ、この機会にパパ部門のネットワークづくりに協力しようということになる。代表となった若いパパは、地域に知り合いがおらず、お父さんつながりに飢えていた。同じパパ同士話したり活動したりする仲間がほしかったとのことである。	すでに活動しているママグループの代表たちの希望もあり、パパネットワークの必要性を感じていたので、プロジェクト提案は前向きに反応。
E	小学校の おやじの会	おやじの会発足から年月が経ち、立ち上げ時のメンバーは残っているものの現役ではない。新しいメンバーが増えないのが悩み。子どもの数が 1000 人を超える大規模校だが、おやじの会への参加率は低い。催しに参加する子どもも固定化傾向にある。このプロジェクトを機会に、活動を活性化し、親子の参加者やおやじの会への協力者を増やし、地域での次世代育成をめざしたい。	教育委員会から、もっとも協力的な校区の地域世話役が紹介され、そこから、プロジェクト参加に名乗りが上がる。
F	プレイパーク での父親活動	活動が定着している冒険広場において、「子どものやってみたい！に父ちゃんたちが力を貸す」「父ちゃんたちもつながる」を目的として参加した。	お母さんたち主導で立ち上げた子どもの遊び場があり、そのメンバーのお父さんによって今回のチームは組織された。活動場所が既にあり、父親たちもこれまで遊び場準備などを一緒にやってきたメンバー。活動の趣旨、目的などを理解し、子どもが遊ぶことの意義を強く感じているメンバーで、結束は強い。
G	思いをもつ パパ同士で 立ち上げてきた 市民活動	自然の多い隣接する町で、自然を生かしてみんなで何かを一緒にやる達成感を得よう、父子で参加して父親の姿をモデルにできる機会を作ろうと考えていた。そして、「お父さんはすごい」「カッコいい」をめざし、仲間が集まって、空いた土地を利用して家を建てるという活動を企画し始めていたところに、プロジェクトの話があり、参加にいたった。	地元の活動に熱心な同じ地域の二人のパパからの発信で、地元のお茶農家、建築士など、ものづくりを子どもたちに伝えたいと考えているメンバーが集まった。また、全員がワークライフバランスを考えて田舎や地元に戻ってきていた 30 代から 40 代前半のパパである。

プロジェクトに参加していた。参加動機には、それぞれのグループの目標も含まれているが、父親同士のネットワークづくり（A、C、D）、地域の次世代育成の機会（B、E）、父子で何かに取り組みたい（F、G）といった内容に分かれていた。また、それぞれの参加動機に関連する内容を背景情報としてまとめた。背景に、行政（B、E）や保育園（A）、子育て支援センター（C）、NPO（D）などが関与しているグループもあれば、父親仲間が集まった（F、G）というグループもあった。これら7つの父親グループについて、グループごとに特徴を分類（表4）し、階層的クラスター分析をおこなった結果、ACD、FG、BEの3つのクラスターに分けられた（図1）。先行研究による父親グループの分類では、「親睦型（父親と子どもの交流や父親同士の交流を中心としたグループ）」と協同型（子供や父親同士の交流に加え、子どもが育つ環境整備や施設運営にも加わり、職員らと共に働き支える活動にも重点をおくグループ）」（吉岡、2006）や「ミッション型（社会活動を主軸とする）」とエンジョイ型（地域活動を中心とする）」（斉藤、2011）がある。本研究では分類されたグループ構成から、父親リーダーとして子育て支援活動に関与する動機に着目して命名するのが適切ではないかと考えられた。そこで、それぞれに含まれるグループの特徴を見直し、BEを「役割意識型」、FGを「自己実現型」、ACDを「新米パパリーダー模索型」と名付けた。BEの「役割意識型」は、代表がおやじの会や子ども会の世話役で、プロジェクト以前からすでに地域で組織化され、活動していた。しかし、いずれもスタッフが減ってきたことから、プロジェクトへの参加を契機に活性化をさせたいという思いがあった。Bは世話役と現役パパの年齢差が大きくなっていることから、次世代育成が深刻な課題と

表4 参加した各父親グループの特徴

グループ	活動の開始時期	代表者の年代	対象となる子どもの年代	目標	参加のきっかけ
A	初年度	30代	幼児期後期	ネットワークづくり	関係者からの働きかけ
B	以前から	60代	小学生	次世代育成	行政との連携
C	初年度	30代	乳児から幼児期前期	ネットワークづくり	関係者からの働きかけ
D	初年度	30代	乳児から幼児期前期	ネットワークづくり	関係者からの働きかけ
E	以前から	50代	小学生	次世代育成	行政との連携
F	初年度	40代	幼児期後期	父子での取り組み	父親仲間での誘い合い
G	初年度	40代	小学生	父子での取り組み	父親仲間での誘い合い

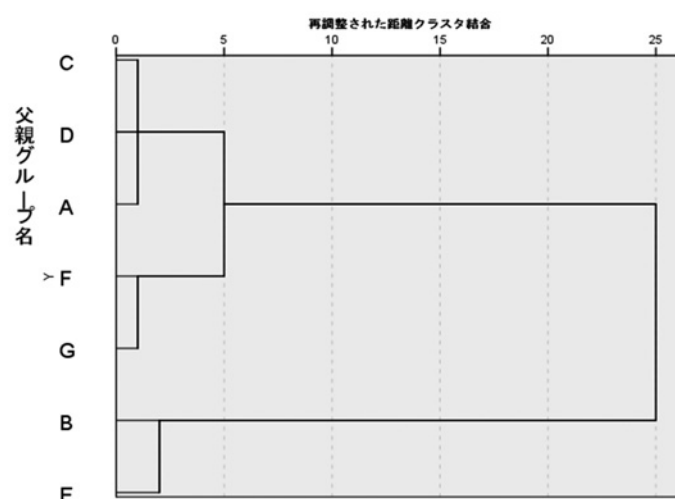


図1 階層的クラスター分析の結果

なっていた。E はメンバーや活動内容が固定化されており、夏まつりで焼きそばを焼いているだけのイメージを払拭し、新入生の父親たちを勧誘したいと考えていた。FG の「自己実現型」では、プロジェクト以前からの父親仲間の集まりであり、それぞれ父親として子どもと体験したいテーマをもっていた。ACD の「新米パパリーダー模索型」は、プロジェクト参加の呼びかけに応じて集まった父親たちで、子育てを始めたばかりの新米パパの集まりであった。保育者や妻、支援団体の後押しに応じて名乗りを上げたが、父親として子育てに関与したいという思いは共通しており、手探りで活動開始であった。つまり、次世代の父親リーダー育成や地域の活性化という目的意識を強く抱いていたグループを「役割意識型」、子どもと一緒にやりたいことに挑戦したいというグループを「自己実現型」、手探りで父親による父親への子育て支援活動を開始しようとしているグループを「新米パパリーダー模索型」とした。

父親イベントの特徴

各父親グループが企画したイベントについて、講師等を招いて子育てに役立つ知識やスキルを伝授したり、地域で恒例の行事に参加したりする活動を「教授型」とした。「教授型」に含まれないイベントについてはその内容や企画目的、感想などを検討した。「教授型」イベントがトップダウン式でより目的が明確であったのに対し、それ以外のイベントは、父親自身がやってみたい競争心をあおるような活動や子どもと一緒に楽しみたい活動であり、いわばボトムアップ的な内容であった。そこで、それらのイベントを「娯楽型」と名付けた。本研究で収集した「教授型」イベントの具体的な内容は、講師を招いての子育て講座や絵本読みきかせ、絵本紹介、ベビーマッサージ、木工教室、指導者による親子遊びやおもちゃ作り、地域連携の恒例行事（夏祭り、餅つき大会）の世話、子ども 110 番スタンプラリーなどであった。「地域の地理を保護者の方々に実際に見ていただくことも目的の一つ」「子どもの健全育成に一生懸命な大人がいることを学んで帰ってくれました」「あれ、うまいこといかん…おお、こういうことかっ!」「新聞ってなんにでも変身するねー、とびっくりされていました」といった記述がみられ、「世話役として参加者にさまざまな活動体験を提供する」ことが目的であったといえよう。一方、「娯楽型」と名付けられたイベントは、大人の秘密基地づくり、虫取り、草野球、得意技の披露（ハンドベル、漫才など）、大凧づくり、瓦割大会や靴とばし大会など父親同士で競い合うもの、新聞発行、川釣り、ハイキング、（自分たちでおこなう）クッキング、家づくりなどであった。「娯楽型」イベントは、父親自身の興味関心から企画され、とくに指導者を必要としない、オリジナルな企画内容のものであった。「パパが楽しければ、子どもも楽しいし、子どもが楽しければママも楽しい。ママが楽しければ、パパも笑顔に、笑顔の連鎖」「この子のいい笑顔。記録よりも記憶に残る大会、楽しけりゃいいよね」「『こんなふうにはしゃいだのは久しぶり、こんな気持ちになって子どもと楽しめたのはよかった』と帰りに伝えてくださり…大成功におえることができました」といった感想が記されており、自分たちが参加して楽しむことが目的となっていた。

父親グループの特徴とイベント内容との関連

グループごとに時系列で活動内容を調べた。いずれのグループも 1 回の集まりで複数の活動が報告されていた。企画段階から複数のプログラムを用意していた場合もあれば、メインとなる活動があり、派生的に別の活動が加わった場合もあった。例えば、イベントの隙間時間に子どもたちが自然発生的に虫取りを始め、それに父親も参加した、という流れである。活動内容として発信されていたものは、企画者にとって何らかの意義が感じられたものであると解釈し、すべてイベントとして取り上げた（表 5）。図 2 に父親グループの型別のイベントの経年変化を示す。以下に、それぞれの父親グループの型ごとに内容を見ていく。

表5 父親グループ型別各イベント型数の経年変化 実数（ ）内は%

父親グループの型	グループ	前半		計	後半		計
		教授型	娯楽型		教授型	娯楽型	
役割意識型	B	7(100.0)	0(0.0)	7	6(66.7)	3(33.3)	9
	E	9(81.9)	2(18.2)	11	9(75.0)	3(25.0)	12
自己実現型	F	2(28.6)	5(71.4)	7	0(0.0)	14(100.0)	14
	G	2(22.2)	7(77.8)	9	2(18.2)	9(81.8)	11
新米パパリーダー模索型	A	4(50.0)	4(50.0)	8	2(14.3)	12(85.7)	14
	C	4(57.1)	3(42.9)	7	4(44.4)	5(55.6)	9
	D	7(77.8)	2(22.2)	9	3(21.4)	11(78.6)	14

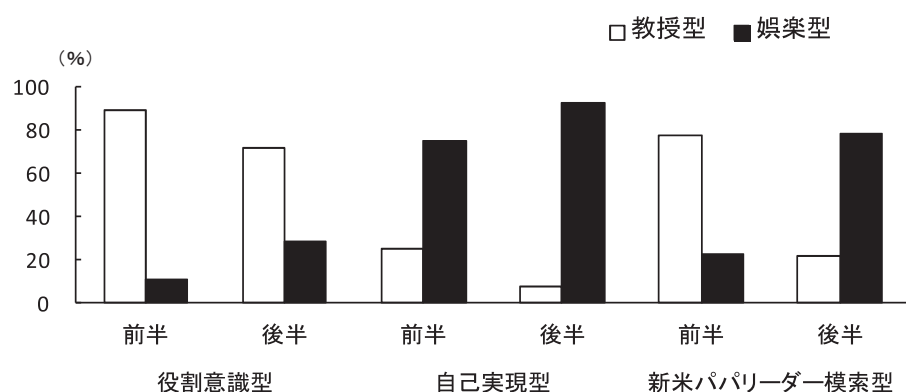


図2 父親グループの型別イベントの経年変化

役割意識型

BとEは既存の団体であるため、地域連携企画が年間スケジュールに組み込まれており、とくに前半は「教授型」イベントが主であった。Bは、以前から連携していた地域での恒例プログラム以外に、ミニ運動会をおこない、参加者を増やし継続させるため、プログラムの工夫や広報活動に力を入れている様子が報告されていた。Eは、学校と連携協力している恒例の活動に加え、オリジナルな親子遊びの企画を模索し、巻き巻きパンづくりが新しいイベントとして持ち込まれていた。

自己実現型

FとGは前半7割以上、後半は8割以上が「娯楽型」イベントであった。Fは、初回に遠方の父親活動団体を見学し、以降すべてオリジナルな企画を自分たちでおこなっていた。Gは、本格的な土壁の家づくりという目的が当初からあり、その作業に子どもたちを巻き込み、作業の合間に野遊びやバーベキュー、お菓子まきなどを含めながら、継続的に取り組んでいた。

新米パパリーダー模索型

AとCは、当初は手探りで企画を進めていたようであったが、徐々に自由に自分たちが楽しめることを父親だけで企画するようになっていった。イベント内容では、当初は「教授型」が8割近くであったが、後半は逆に「娯楽型」が8割近くになっていた。とくにDは、前半は後援の子育て支援NPOがプログラムの主導権を握っており、講師指導のもとでの制作やゲームといった「教授型」が目立ったが、後半になると「パパリーダーのアイディアによりプラバン作りをしました」「パパたちで話を進めていただき、いろいろな意見が出ました」「パパがみんなで考えてくれたミニ運動会（親子で組んで取り組むものと父親同士で競い合うものが含まれていた）をおこないました」といった報

告が続き、「娯楽型」が含まれるようになっていた。

すべてのグループで、後半に「娯楽型」イベント数が増えていたが、中間報告会で他のグループの活動内容を聞いたことが刺激となったと考えられる。とくに、「新米パパリーダー模索型」に含まれる父親グループはすべて、Fが企画した父腕グランプリ（父親たちが力自慢をするプログラム）に関心を示し、見学参加したり、内容を取り入れたりしていた。

「新米パパリーダー模索型」グループが企画したイベント内容の分析は、今回の研究の目的である、父親支援における留意点を明らかにすることにもっともつながるのではないかと考えられる。新米パパリーダーたちは、「役割意識型」による「教授型」イベントの情報も「自己実現型」の先輩パパによる「娯楽型」イベントの情報も等しく得ることができ、さらに父親向けイベントの助っ人講師としてファザーリングジャパン関西のスタッフを招くこともできるという条件にあった。そのような中で、彼らが父子向けイベントとして選択したイベントには、まさに彼らが魅力を感じた要素が含まれていたと考えられる。つまり、父親による父親支援においては、生活スキルや子育てスキルを伝授するよりも、童心にかえって父親自身の子ども時代の再現を父親同士で共有し、集団遊びを楽しむという、ギャングエイジ的なテーマが好まれるのではないかといえよう。

また、「役割意識型」でも後半に「娯楽型」イベントが増えていた。現役世代の「自己実現型」グループの報告から、「娯楽型」のイベントの方が父親に好まれると理解され、後半に企画されるようになったのかもしれない。あるいは、同じ男性として単に興味があったということも考えられる。いずれにしても、オフ会や中間報告会、ホームページ上でのグループ間の交流は、それぞれの父親グループの活動内容に広がりをもたせる効果があったといえよう。また逆に、父親たちは情報発信と受信の機会があれば、自主的な活動に広がりをもたせることができるともいえよう。

NPO 法人彩の子ネットワーク（2011）による男性・父親発子育て実感アンケート結果から、父親の方がより「男性」を意識しており、「父親は家族や子どもを養う者」「弱さを見せられない」「子育ては私事だから親や家族が担うべきもの」と強く反応していた。このことから、父親同士が子育ての情報交換をおこなったり、子育て上の悩みを打ち明けて支え合ったりするようなネットワークではなく、父子で楽しめる活動の場を提供し仲間関係を形成するような支援のあり方がふさわしいと考えられる。また、一方で、今回の調査対象の父親グループでは、構成メンバーの数が少ない父親グループほど仲間内で楽しめるイベント企画に陥りやすく、ネットワークの構築といった視点は弱くなる傾向がうかがえた。したがって、父親グループの担い手にとっては、父親自身が楽しんで参加できるような支援から、子育て仲間の拡大や次世代育成といった役割意識へとどのようにつなげていくのが課題となるだろう。

IV まとめ

本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

「おやじの会」など学校や行政と結びついている父親グループでは、次世代育成が課題となっており、企画者が世話役となり、参加者に活動体験を提供する「教授型」イベントが主として企画されていた。

父親仲間たちが自主的に集まり、自分たちが子どもと共有したい活動に取り組む「自己実現型」では、自分たちがいかに楽しめるかが目的であり、競争心をあおるような企画が目立っていた。

子育てに参加したばかりの「新米パパリーダー模索型」では、当初は「教授型」イベントが企画されていたが、「自己実現型」の企画イベントの報告が刺激となったのか、「娯楽型」のイベントが取り入れられる傾向が見られた。

「役割意識型」グループも後半に「娯楽型」イベントが若干であるが増加していた。このことから、

父親同士の交流の機会と発信の場の提供が活動内容に広がりをもたせることにつながったといえよう。

父親への子育て支援においては、役割モデルや子育てスキルに関する情報の提供よりも、自然体で参加でき、父親自身が楽しみつづ子どもに見せたい活動を提供する方が好まれ、父親の主体的な関わりを促すうえで有効ではないかと考えられた。また、活動の成果を発信することで活動の意義が実感でき、活動の継続につながるのではないかと考えられた。

引用文献

- 小崎恭弘 (2016). 父親支援に関する全国自治体調査について. <http://www.blog.crn.or.jp/report/02/220.html> (2016年9月20日取得)
- 子どものしあわせプロジェクト実行委員会 (2015). 2012年トヨタ財団国内地域助成採択事業 子どもとしあわせプロジェクト ― 未来に続く父親ペアレントメンター養成 ― 事業報告書.
- 厚生労働省 (2016). 児童虐待の現状. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/about.html (2016年9月10日取得)
- 厚生労働省 (2014). 健やか親子21 妊娠期からの児童虐待防止. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html (2016年9月17日取得).
- 日比野直子 (2013). 母親のライフコースにおける子育て ― 母親の語りによる子育て過程と支援 ―. 金城学院大学論集, 人文科学編, 第9巻第2号, pp.96-119.
- 松本しのぶ (2012). 父親支援の効果と課題. JSPS 科学研究助成調査研究 (23730556).
- 宮木由貴子 (2014). 父親同士の交流の現状と可能性 ― 子どもをきっかけとした父親同士の関係性をもたらす効果 ―. 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部.
- 野々山久也・河野由美・金井塚美根 (2002). 地域における子育て支援についての調査研究報告書. 兵庫県(財)兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所, p.40.
- 野々山久也・二階堂裕子・斎藤優子 (2006). 平成18年度子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開 ― 父親の活動をめぐって ― 調査研究報告書. 少子・家庭政策研究(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構, pp.15-17.
- 日本ユニセフ協会 (2015). 東日本大震災 父親家庭+父親支援プロジェクト報告書.
- NPO 法人彩の子ネットワーク (2011). 男性・父親発子育て実感アンケート結果報告書.
- 及川裕子・宮田久枝・新道由記子・登日麻並 (2012). 現代日本における男性と出産・育児. 園田学園女子大学論文集, 第46号.
- 斎藤進 (2011). 地域における父親支援の現状と今後. 愛育ねっと(子ども家庭風刺情報提供事業) <http://www.aiikunet.jp/exposion/manuscript/910.html> (2016年8月10日取得)
- 清水里美・馬見塚珠生・吉島紀江 (2012). 効果的な子育て支援のあり方 ― 父親グループへのペアレントトレーニングプログラム適用の試み. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 48, pp.121-130.
- 竹之下典祥 (2012). 父親への子育て支援を考える ― 父親ネットワークづくりと次世代育成 ―. 日本保育学会68回大会 自主シンポジウム資料.
- 横浜市教育委員会生涯学習課 (2002). 保護者の家庭教育参加に関する意識調査, p.33, 35.
- 吉岡亜希子 (2006). 父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容. 社会教育研究, 24, pp.11-23.

Relationship between Father-group Characteristics and Event Types in a Child-rearing Support Project

SHIMIZU, Satomi · MAMITSUKA, Tamao · YAMOTO, Yoko

The authors carried out a “Children’s Happiness Project” in 2013 and 2014 funded by the Toyota Foundation. In this study, characteristics of the father-groups participating in the project and inter-annual variations of the events executed during these two years were analyzed.

Firstly, the father-groups were divided into three clusters: “role-conscious”, “self-realizing” and “new-father’s leader”. Secondly, the contents of the events were divided into two: “top-down teaching style activities” and “bottom-up entertainment type activities”.

It was observed that “self-realizing” tends to prefer “bottom-up entertainment type activities”, whereas, “role-conscious” tends to prefer top-down activities. In the latter half of the project, however, “bottom-up entertainment style activities” also increased in number for “role-conscious” & “new-father’s leader”.

Thus, to create opportunities for fathers to meet each other in their communities could be an effective way for involving fathers in child-rearing. In addition, it is expected that fathers’ spontaneous participation will expand if “bottom-up entertainment style activities” were to be increased.